

導をわたすことであり、植物の研究者にはとりわけ辛い仕事であった。植物図書室の図書の本館移管分の選択も大変な作業であった。以下各講座ごとに簡単な雑感を寄せてもらった。

植物関係では最初に細胞構築学講座が八月二七日に移転を開始した。この講座は新設講座で理学部一号、三号館、旧教育学部と三箇所に分散している。現在の学生はともかく、教官は研究室がやっとなって大変喜んでいて、とにかく無事大移転を終了したのはなによりである。

植物分類学講座の移転は九月二日に集中的に行われた。作業は実に順調に進んだ。そこにいたるまでの過程は大変なこと、分類学と標本とは切り放せないが、標本箱の梱包作業は七月中旬から開始し、連日連夜で五千箱の梱包とシール貼りを終えた。この移転に備えての標本整理は数年前から開始し



旧3号館前の移転風景 陣頭指揮の西川学部長、物性学科の藤原教授、植物学教室の樋口助手、西川、山際の大学院生の顔が見える

ていたので、本講座の移転は即標本の移転であったと言っても過言ではない。以上の奮闘にもかかわらず、実際に西条キャンパスに移転できたのは二千箱で、残り三千箱は保管場所未定のまま旧理学部二号館に残留している。植物園、温室、圃場の移転もまだである。以上のような次第で、まだ移転完了の実感に浸り切れない。

植物生理学講座では、六部屋の物品について教職員、学生計八名で移転作業を行った。移転一週間前まで、学生は実験を続け、その後全員で梱包作業に入った。使用頻度の低い物は品目ごとに同じサイズの箱に梱包すると移転後の整理が楽である。梱包物品に貼付する輸送票に搬出元と搬入先が正確に記

入されていていさえすれば問題はない。梱包の手を抜き過ぎてやり直しを命ぜられ西川学部長にも手伝わってもらうようなこともあった。大型機器の部品が行方不明となり、後日トラックのシートの下から出てきたが、これにもチャント輸送票は貼ってあった。

植物形態学講座は分類、生理と同じ日に移転した。この移転全般について、次のような問題点があったと感じている。事務室との連絡不十分：移転日程はおおまかには知らされていたが、種々の調査、書類が提出間際に配布されることしばしばで、テンテコ舞いをした。建新に関する不平等感：各分野間、研究室間に不平等感を残したのではない。学生の移転作業の援助：



温室、植物園、圃場の移転は平成四年三月

地学科の場合

理学部地学科 本多 了

全員が移転を最優先に
計画不備のために校費
負担にならないように

移転の成功・失敗談をまとめるようにとのことで、教室の方々にご意見を願いましたが、皆さんお忙しいのか、はたまた、移転の苦勞を早く忘れたいのか、ほとんどご返事はいただけなかった。先ず私個人の意見を言わせていた

研究室配属の四年生以上の学生諸君に大いに助けられた。なんらかの形で謝意を表されればと思う。(統合移転委員)

旧1号館二階の廊下は標本で埋め尽くされていた